

ネットワーク

がんばってまーす

「昭和のおやじも頑張ってるよ」

沖縄県那覇市環境保全課主幹

比嘉 良裕

はいさい ぐすーよー ちゅう うがなびら
(こんにちは、皆さん ご機嫌いかがでしょうか)



本市は沖縄本島の南部に位置し、人口 32 万人余の県都で、県内唯一の中核市です。本市には大型クルーズ船が入り出る那覇港や日本国内のみならず、世界各地を結ぶ那覇空港を有しており、「日本の南の玄関口」として重要な役割を担っています。

それでは、観光客に人気の、那覇の 3 大祭りの一つである「那覇ハーリー」を紹介しましょう。「ハーリー」とは爬竜船（はりゅうせん）競争のことで、豊漁と安全を祈願し、県内各地の漁港では旧暦の 5 月 4 日に、那覇ではGW期間中に開催されます。那覇と他地域の違いは「舟」にあります。地域のハーリー舟は、漁労用のサバニを操りますが、那覇の舟は全長 14.5 メートル、幅 2.1 メートル、重さは 2.5 トン、乗組員が 42 名になる大型のもので、舳（へさき）には竜頭を、艫（とも）には竜尾の彫り物を飾った特別な舟です。



3 艇によるハーリー (写真：沖縄県那覇市)

競争は、一般職域や女性のみ、米軍人チーム対決などで行われており、青年会や企業団体、中高生などで結成したグループが、練習を重ね、名誉をかけて真剣に対決しています。

皆さんが、沖縄を訪れる機会があれば、是非とも伝統ある「那覇ハーリー」をご覧くださいと思います。

さて、公害苦情の本題に入ります。那覇市は 39 平方キロメートルの面積しかなく、人口密度は、全国的にみても非常に高いものとなっています。そのため、公害苦情相談の内容も、典型的な都市型公害となっています。平成 28 年度の集計では全体の 148 件中、1 位が騒音 56 件、2 位が悪臭 35 件と両苦情で 6 割強を占めています。騒音の中では建設作業や解体作業に関する苦情が目立っています。戦後、空いた土地にタケノコのように建物が建ったため、隣接の建物と僅か数十センチしか離れていないことも多く、建設・解体工事による苦情が出ないように施工するには、困難を極めます。

当課では、大気騒音の業務を所管するグループ4人と水質・自然環境保全業務を所管するグループ4人の計8人で、公害苦情の相談処理を実施しています。なお、苦情相談処理は原則2名体制で対応しています。

苦情相談の多くは、直接電話を当課にかけてくるものが多いのですが、他課で相談し、廻されてくる事案もあります。最近はネットを介した電子相談も増えてきています。

今年の公害苦情相談処理の中でも、興味深かった事例を紹介してみたいと思います。

相談内容は、「住宅街のど真ん中から煙が上がり、洗濯物が干せない」などで、同僚と現場へ急行しました。しかし、「野焼き」らしき現場は見当たらず、しばらく周りを歩いてみると、やっと表通りの家の隙間から、煙が上がる“煙突”を見つけることができました。

私と同僚が家主に声を掛け、煙が充満する現場を訪ねてみたところ、そこには五右衛門風呂を髣髴させるシンメナービ（ジュラルミン製・直径約1.8m程度）があり、家主が木材を燃やし、風呂を焚いていました。なぜか建物横には、石油ボイラーがあるのです。

私たちにとっては懐かしい光景をしばし眺めながら、そのデジャブな香りに浸っておりました。半ばパニックになりながらも、心の中では「仕事」だよ、指導しなくては、と冷静さを装いつつ言葉を選びながら、第一声を発した。「お風呂ですかー、暖かそうですね。寒い冬には良いですねー。」っと。「薪は廃材ですねー」っと。

同僚が耳元で「おいおい何言ってる、指導は？」と小声で呟いてくる。いーじゃないか「お風呂ぐらいは」という心押し殺しながら、「あの一仕事で来ているんですが・・・」とマニュアルどおり会話を始めた。しばし会話を楽しんだ後、帰り際、釜の火を消してくれたので、事なきを得たのでありました。

帰りのタクシーの中では二人とも思いっきり昭和を語っていました。「うちの家も物心つくまでカマドでご飯焚いていたよ」とか、「銭湯（廃材が燃料）に良く行ったナ〜」とか・・・延々と昭和の当たり前の風景を思いだしながら「今回の公害は何にしようか？大気汚染かなー悪臭かも？いやー公害じゃない昭和の常識だろ！」などこれまた悩ましい会話に終始したのでありました。

かくして、おそらく「那覇で最後の風呂ガマは幕引き」を迎えたのでありました。